『三國史記』「屋舎」条の「階」に関する小考

A STUDY ON ARCHITECTURAL MEANING OF GYE IN THE OKSA OF SAMKUK-SAGI

李 楨 美*

Jeongmee LEE

One among the valuable historical books in Korea is “*Samkuk-sagi*” recording the history of Sila dynasty which was contemporary with T'ang dynasty(唐, China) and Heian(平安, Japan). The academic world regards ‘Oksa(屋舎)’ in “*Samkuk-sagi*” as a regulation before the reign of King HungDug(A.D826-836). But nobody knows the building code in Koryo dynasty, which succeeded to Sila. After that time, Chosen dynasty distributed the housing limit regulations concretely.

Unfortunately, there are no wooden architectures left. But the substructures prior to 13th are found here and there. For studying of Korean ancient architecture, we are totally dependent on the results of archeology and the study of records. Under this present circumstance, we can't but be much interested in the substructures. ‘Gye(階)’ has two opinions; one is ‘podium’, another ‘stairs’. A rich diversity of opinions is now under way.

This paper is a part of an effort to clarify the meaning of Gye by a comparative study on the records, remains in that day. And, I expect this study to contribute to the study about the history of architectural laws and conservation of cultural properties.

Keywords : *Samkuk-sagi, Samkuk-yousa, Oksa, Podium, Stairs, Gye*

三國史記、三國遺事、屋舎、基壇、階段、階

1. はじめに

韓国の歴史学界において三国及び統一新羅と高麗時代に関する研究は、南北分断の現実と現存遺構のような実証的資料の不足という限界のため、あまり進んでいない。特に、建築分野においては、韓国古代史研究の出発点となる『三國史記』に、住宅建築法令である「屋舎」条(以後「屋舎条」と表記)が当代の建築用語で記されているが、現存遺構がほとんどないため文献に記された建築形式の具体化は、長い間研究の争点となっている。

「階」の解釈も「屋舎条」に関する既存研究で「基壇」または「階段」と解釈され二つの説があり、持続的に議論となって来た。本論文で特に「階」に注目する理由は、現存する石造遺構の部分的検討を通じて、新たな解釈ができるためである。

従って、本論文では『三國史記』と『三國遺事』^(註1)の「階」に係わる記事を収集して、建築的意味を解釈することが、第一の目標であり、これに基づいて建築史の研究における、文献研究の可能性を検討したい。

古文献研究にあつて中国側の語源検討は重要なことであるが、同じ建築用語も韓・日・中の建築文化の差によって、その意味が互に異なる場合もある。また、自国内における言語の意味の拡大と縮小及び生成と消滅の過程、即ち言語の時代性にも注目しなければならない。たとえばその文献が記された当時の建築用語に関する研究をせずに、現在通用される言語及び遺構を通じて文献を解釈する場合、大きな誤りを犯すこともある。このような背景により、本研究では「屋舎条」が記された時代における「階」の建築的な意味に注目して研

究を進行したい。

「屋舎条」に関する研究は、現存遺構がない韓国古代の住宅建築の形式を具体化できる重要な方法であり、将来的には古代建築の復原の可能性も期待できる。

2. 『三國史記』「屋舎条」の先行研究

『三國史記』は高麗仁宗 23 (1145) 年に金富軾などが編纂した紀伝体の歴史書で、韓国の三国時代と統一新羅時代に関する最古の正史である。金富軾は王命に応じて三国の歴史を編纂し、後世の手本としたいという望みを「進三國史表」^(註2)に記している。また『三國史記』の編纂当時『舊三國史』や『唐書』など既存史料を削除せずそのまま転載したのも明らかにされている。下の表1は『三國史記』と『三國遺事』の引用史料を整理したものである。実際に、この中で現在対照できる中国史料を検討すると、原典の内容を忠実に反映していたことが確認できる。従って、『三國史記』と『三國遺事』は高麗時代の編纂であるが、記録の史実性は認められると考えられる。

表1『三國史記』と『三國遺事』の引用史料

三國史記	三國遺事
国内：三韓古記、海東古記、新羅古記、新羅古事、花郎世記、鷄林雜傳、高僧傳、樂本漢山記、帝王年代曆など	古記、寺誌、金石文、古文書、史書、僧傳、文集、説話、傳説
国外：三國志、後漢書、晋書、魏書、宋書、梁書、南北史、唐書、通典、冊府元龜、資治通鑑、古今郡國志、新羅國記	

*This work was supported by the Korea Research Foundation Grant funded by the Korean Government (MOEHRD). (KRF-2005-214-D00389)

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
外国人客員研究員・工博

Researcher, Dept. of Architecture, Graduate School of Engineering, Univ. of Tokyo,
Dr. Eng.

2-1 「屋舎条」の制定年代検討

『三國史記』は全九冊五十巻で構成されており、「屋舎条」は卷第三十三の「雜志」第二に記されている。「屋舎条」^{註3)}の全文は以下のとおりである。

1) 眞骨、室長廣、不得過二十四尺、不覆唐瓦、不施飛簷、不雕懸魚、不飾以金・銀・鍮石・五彩、不磨階石、不置三重階、垣牆不施梁棟、不塗石灰、簾緣禁錦・罽繡・野草羅、屏風禁繡、床不飾玳瑁・沈香。

六頭品、室長廣、不過二十一尺、不覆唐瓦、不施飛簷・重枕・栴牙・懸魚、不飾以金・銀・鍮石・白鐵・五彩、不置巾(中)階及二重階、階石不磨、垣牆不過八尺、又不施梁棟、不塗石灰、簾緣禁罽・繡綾、屏風禁繡、床不得飾玳瑁・紫檀・沈香・黃楊、又禁錦薦、不置重門及四方門、廐容五馬。

五頭品、室長廣、不過十八尺、不用山楡木、不覆唐瓦、不置獸頭、不施飛簷・重枕・花斗牙・懸魚、不以金・銀・鍮石・銅・鐵爲飾、不磨階石、垣牆不過七尺、不架以梁、不塗石灰、簾緣禁錦・罽・綾・絹・施、不作大門・四方門、廐容三馬。

四頭品至百姓、室長廣、不過十五尺、不用山楡木、不施藻井、不覆唐瓦、不置獸頭・飛簷・栴牙・懸魚、不以金・銀・鍮石・銅・鐵爲飾、階砌不用山石・垣牆不過六尺、又不架梁、不塗石灰、不作大門・四方門、廐容二馬。

外眞村主與五品同、次村主與四品同。〔下線は筆者〕

上記の「屋舎条」では身分によって、家舎を制限^{註4)}する。そこには室^{註5)}の規模及び形式から家具の飾りに至るまで、住宅建築の制限事項^{註6)}が記されている。従って「屋舎条」の制定時期を把握することは即ち、当時の建築文化と様式を把握することになると考えられる。法令の制定年代に関する記録はないが、「屋舎条」を含んでいる「雜志」の内容からそれを類推できる手掛かりが見られる。

表 2 「雜志」第二の規制身分の区分

条	色服	車騎	器用	屋舎
身分の区分	眞骨大等	眞骨	眞骨	眞骨
	眞骨女	眞骨女	六頭品から五頭品同	六頭品
	六頭品	六頭品	四頭品から百姓同	五頭品
	六頭品女	六頭品女		四頭品から百姓同
	五頭品	五頭品		百姓同
	五頭品女	五頭品女		
	四頭品	四頭品から百姓同		
	四頭品女	四頭品女から百姓女同		
	平人			
	平人女			
	外眞村主與五品同、次村主與四品同			

「雜志」第二は色服、車騎、器用、屋舎の四項目で構成されている身分別の規制条項である。上の表2から分かるように、「色服」は「眞骨大等」から「平人」まで、その他には「眞骨」から「百姓」までと適用身分が区分されている。「大等」とは新羅初期には一部の眞骨のみが参加できる会議の構成員を意味していたが、眞徳王(647-654)以後になって眞骨で一般化^{註7)}した階級である。「平人」と「百姓」は最下級身分である。

このような身分の名称に多少の差はあるが、「眞骨」はすべての条項で独立した身分となっており、「六頭品」は器用で「五頭品」と同じく、「四頭品」は車騎、器用、屋舎で「百姓」と同じく扱われている。ところで、表2の下部にある、「外眞村主與五品同、次村主與四品同」

という部分については、議論の余地がある。これは「屋舎」の最後に記されているため、文章の構成から見るかぎり、「屋舎」に属している。しかし、他の項で「外眞村主」と「次村主」の身分が抜け落ちているので、表2に示したように、「雜志」第二の色服、車騎、器用、といった全ての内容に係っていると考えられる^{註8)}。このように、「雜志」を構成する条項が互いに密接に関わっていれば、「屋舎」の制定年代が推定できる。なお「色服」に載せられている次の興徳王(826-836在位)の教書も、「色服」のみならず、すべての条項に関わっていたと考えられる。

2) 興徳王即位九年、太和八年、下教曰、人有上下、位有尊卑、名例不同、衣服亦異、俗漸澆薄、民競奢華、只尙異物之珍寄、却嫌土産之鄙野、禮數失於逼僭、風俗至於陵夷、敢率舊章、以申明命、苟或故犯、固有常刑。(『三國史記』卷第三十三、志第二、色服)

上の記事で、「敢率旧章」に注目したい。旧章は確かに興徳王以前すでに備えられていた法令である。この記事は太和八(834)年に興徳王は、これを補った新たな法令を公布したということを意味する。従って、「屋舎」は834年ごろに公布された建築法令であると考えられる。

建築法令として「屋舎条」が持つ建築史的意義は、最古ということと共に、具体的に成文化された記録であるという点にある。従って、「屋舎条」の解釈は現存遺構が無い韓国の九世紀前後の建築形式に関する研究における根拠の一つとなる。

2-2 「屋舎条」の「階」に関する先行研究

「屋舎条」で「階」に係わる用語は「階石」、「階砌」、「中階(または巾階)」、「二重階」、「三重階」などで、他の条項に比べて比較的内容が多い。下の表3は先行研究で行われた「屋舎条」の「階」に関する解釈部分を集め整理したものである。表3で見るように、「屋舎条」に関する研究を初めて行った金正基から最近の李相海に至るまで、「階」の解釈には「基壇」と「階段」の二つの意見がある。

表 3 『三國史記』「屋舎条」の「階」の解釈に関する既往研究の比較表

区分	金正基 (1977)	申榮勳 1 (1983)	申榮勳 2 (1984)	朱南哲 (1987)	李相海 (1995)
階石	基壇石	デッドル(台石)と踏み石	デッドル(台石)と踏み石	階段	階段石
階砌	基壇や階段に使われた石材	デッドル(台石)	デッドル(台石)、踏み石、礎石	踏み石	踏み石
山石	治石になった石	山石	山石	石(山石)	山で採取した花崗岩
巾階	飾り付けた階段と基壇	左右の袖石	左右の袖石	袖石	階段間の面石
二重階	二重基壇(二段の基壇)	ドゥボルデ	ドゥボルデ	二つの階段を並べた状の階段	一幅の階段を二つに分けたこと
三重階	三重基壇	セボルデ	三幅(踏み石)	三つの階段を並べた状の階段	一幅の階段を三つに分けたこと

金正基^{註9)}は「三重階」を、「朝鮮王朝の王宮の正殿などが二重または三重の基壇を持っており、新羅時代にも王宮の重要建物には三重基壇があった可能性が充分あるから」、「三重基壇」と解釈し、「巾階」は「高欄などで飾り付けた階段」と解釈した。しかし、朝鮮時代の史料を根拠として文献を解釈し、「巾階」、「不磨階石」、「階砌山石」などについては解釈の根拠を提示していないなどの問題がある。

申榮勳^{註10)}は二回の研究で、「三重階」は基壇石を三段に重ねて積んだ「セボルデの基壇」、「二重階」は基壇石を二段に重ねて積んだ「ドゥボルデの基壇」、「巾階」は「ソメッドル(袖石：以下、袖石と表記)

で左右を構えた階段」と解釈した。三重階を基壇と解釈していることは金正基の意見と一致するが、具体的な根拠の提示はない。また、朝鮮時代の民家の基壇と比べて「屋舎条」を解釈しているものの、身分階級と建築形式との関係及び現存する石造遺構との比較検討は行っていない。

朱南哲^{註11)}は「皇龍寺木塔跡の南面から発掘された、三つの階段を一定間隔に列べた形と判断される遺構」などを根拠として、「三重階」を「三つの階段を並べておいたもの」、「巾階」は「袖石を左右に構えた階段」と解釈した。

李相海^{註12)}は高句麗古墳の壁画と中国の雲崗石窟及び敦煌石窟壁画を根拠として、北魏時代の壁画を新羅建築と通じると見て、「三重階」は「一幅の階段を三つに分けたもの」、「二重階」は「一幅の階段を二つに分けたもの」、「巾階」は「階段の間に見える面石」と解釈した。

以上で示したように、「屋舎条」に関する初期の研究では、「階」は「基壇」または「階段」という二つの意見があったが、後期には全て「階段」と解釈されている。

現在までの「屋舎条」に関する研究は、主に「室長広」の解釈に主眼を置いて他の規制を解釈する方法で行われて来た。そのため、反復された研究でも細部要素の解釈に関する研究はあまり進んでいなかった。階は建築の小さな一部分であるが、建築の細部要素は全体と有機的相関性を持っている。従って、部分の綿密な研究は全体の建築形式を確認できる研究方法となるだろう。

3. 『三國史記』「屋舎条」に見る階の解釈

現在、「階(階)」の辞典的意味は「階陸」や「階段」または「踏み石」^{註13)}などであり、韓国の人文学者は普通「階段」と説明している。これは建築学界でも同じで、「屋舎条」の解釈に関する最近の研究でも「階段」とする見解が圧倒的である。しかし、今まで文献分析を通した建築言語に関する十分な検討が行われていなかったという問題点を指摘しなければならない。それ故にこれからはまず、「屋舎条」の中で「階」の規制事項を比較検討し、さらに『三國史記』と『三國遺事』に記された「階」や「基壇」及び「階段」に係わる記事を検討したい。

表 4 階に関する身分別建築規制 (●:可)

身分	階石	階砌山石	中(巾)階	二重階	三重階
眞骨	不磨	●	●	●	不置
六頭品	不磨	●	不置	不置	不置
五頭品 (外眞村主與五品同)	不磨	●	不置	不置	不置
四頭品至百姓 (次村主與四品同)	なし	不用	不置	不置	不置

表4は前掲の『三國史記』「屋舎条」の中で、「階」に係わる規制事項を身分別にまとめたものである。比較的詳しい事項が記されているため、まず規制条項の相互分析によってその形式を把握することができる。

3-1「階石」と「階砌山石」との関係から見た「階」の意味

「不磨階石」と「階砌不用山石」の規定を見ると、「階」は階段と同時に基壇の意味とも解釈できる。四頭品と百姓の場合は「階砌不用山石」の規制だけがあって、「不磨階石」の規制はない。階段と基壇を設ける時「山石」即ち、山で採取した石が使えないため、石を磨くことに係わる規制は省略されたと考えられる。五頭品以上は階段と基壇

石に「山石」は使えるが、人為的に磨くことは禁止されている。

ところが、「積む」、「重なって積む」という意味である「砌」^{註14)}に注目すれば、「階砌山石」の「階」は石材を積み重ねて築かれる基壇の意味であると考えられる。これに係わる記事を『三國遺事』の「万波息笛」から見出せる。

- 3) 寺中記云、文武王欲鎮倭兵、故始創此寺、未畢而崩、爲海龍、其子神文立、開耀二年畢排、金堂砌下、東向開一穴、乃龍之入寺、旋繞之備、蓋遺詔之葬骨處、名大王岩、寺名感恩寺、後見龍現形處、名利見臺。(『三國遺事』卷第二、紀異第二、萬波息笛)

上記の史料は感恩寺の創建に関する内容である。死後に竜になった文武王が寺に入れるように、「金堂の基壇の下(金堂砌下)に東向きの穴を開けておいた」と記している。金堂で竜が出入できる穴を開けたという「砌下」は、施設の位置関係から見ると、階段とは考え難く、金堂の基壇下部と見たほうが妥当である。実際に感恩寺金堂址の基壇地面には、東の小さな開口部から中央にある仏台座の下に至るまで長く掘られた跡が発見された^{註15)}。(図1)即ちこの「砌」^{註16)}は金堂の基壇全体の意味とも考えられるし、穴の位置を指示する一つの基壇部材とも考えられる。

図1 感恩寺金堂址の竜穴の推定処

韓国の建築において階段は、基壇に従属するものであるため、四頭品と百姓に対する「階砌不用山石」の規制は、結果的に基壇のみならず、階段にも山石を使ってはいけない、という規制にもなる。また、全ての階級に対する、階石を磨くことを禁ずる「不磨階石」の規制を、基壇を除いて階段の石のみと見ることは不合理である。

3-2「巾階」と「中階」の解釈

「巾階」については、ほとんどの研究者の場合、袖石であると意見が一致している。一方、現在伝えられている『三國史記』は高麗時代の版本の摩滅あるいは毀損された部分を、朝鮮時代の太祖三(1394)年と中宗七(1512)年の二回にわたり、補って刻んだものであり、そのために一部に誤記があるとされている。その点に関しては人文学者たちによる検討が続けられている。その中には「階」に関する部分もあり、特に「巾階」については最近韓国精神文化研究院が発刊した『訳註三國史記勘校』(2002)と李丙燾の『原文三國史記』(1983)では「中階」と規定されている。

「巾階」を「階段の袖石」^{註17)}とし、「中階」を「基壇の中央に位した階

段」とする見解には、異見の余地がない。しかし「巾階」を二重階と三重階の解釈と関連させてみると、「一幅の階段を袖石で二幅あるいは三幅に分けた階段」の意味になるため、「階」に関する解釈においては重要な部分となる。

「巾階」即ち、「袖石のある階段」は、階段の両側に袖石をおいて、区切りを作る格式ある手法である。ところで、眞骨は「不磨階石、可用階砌山石、可置巾階及二重階」だと規定されている。この時、「巾階」を「袖石のある階段」だとすると、「磨いてない石で造った一幅の階段に、袖石を設けて左右二つに分けたもの」を造ることができるということになる。いまだに、磨いてない石で造った階段を袖石で飾りつける事例は確認されていない。

しかし、それを「中階」だとすれば、眞骨のみが「可置中階」となる。即ち、六頭目以下では室の中央に階段を設けられず、東西階段のみを設けられることになる。東西階段は『儀礼』や『礼記』など行礼に関する文献から確認できる。『説文』でも「阼、主階也」^{注18)}と、東の階段である「阼」を主階だと解釈している。即ち、古代には東西の階段が一般的のものであったことが分かる。

図2 双楹塚の室内生活図^{注19)} (左)と佛國寺の金堂(右)の中階

「屋舎条」によると、中央の階段は眞骨と聖骨^{注20)}だけが設けることができた。高句麗時代に造られた双楹塚の室内生活図に描かれている建築物の中央階段と、佛國寺や感恩寺など統一新羅時代の寺院の金堂に設けられた四面の中央階段(図2)は、当時の建物における中階の存在と、その建築的意味をよく表している。また宮殿と寺院だけに許された「中階」が眞骨でも許可されたことは、眞徳王以後から眞骨が王に選出されるようになり、身分が上昇した社会的背景からも理解できる。

3-3 二重階と三重階の解釈

前述のように「二重階」と「三重階」の解釈は、巾階の解釈とも密接な関連性を持っている。従って、「二重階」と「三重階」の建築的解釈は、逆に「巾階」と「中階」の意味を究明する手がかりとなるだろう。また、「二重階」と「三重階」での「重」の意味は、「屋舎条」に記されている「重門」の解釈とも関連している。既往研究では重門の解釈についても、二層の門なのか、内外に設けられた門なのか、など意見が統一していない。

同じく「重」が垂直の意味(上下[層])なのか、あるいは水平(前後[内外])や並列の意味(左右)なのかによって、「二重階」は「二段に重ねた階」あるいは「一幅を二つに分けた階」や「二つの階が並んでいる階」の意味に解釈できる。

『三國史記』と『三國遺事』の中で建築に関わる「重」の記事は、建築物の重修や重営に関する記事が多いが、「重」が層や段と解釈される事例は『三國遺事』の「遼東城育王塔」の記事から見出せる。

- 4) 三寶感通錄載、高麗遼東城傍塔者、古老傳云：…傍有土塔三重、上如覆釜、不知是何…因生信、起木塔七重、後佛法始至(『三國遺事』卷第三、塔像第四、遼東城育王塔)

この記事は育王塔が元々三重土塔の上に、釜を覆ったような形態だったが、高句麗の聖王が仏教を受け入れた後、その場所に七重木塔を立てたという内容である。この記事では仏舎利塔の形態で見当がつく初めの三層塔と後の七層木塔の層数を、全て「重」字で表現している。即ち、「重」は上下層の意味を持っている^{注21)}。これは、図3の統一新羅時代の塔に見える「二重基壇」様式と皇龍寺金堂址の「三重基壇」の跡など多数の石造遺構から確認できる。

図3 佛國寺釋迦塔の二重基壇(左)と皇龍寺金堂址の三重基壇(右)

このような理由から「屋舎条」の「重階」は「重層の基壇」と考えられる。眞骨であっても「三重基壇」を設けることは許されなかったことは、結果的に宮殿と寺院建築のみ許された「三重基壇」の尊厳性と象徴性を表すためであると考えられる^{注22)}。

以上、「屋舎」に記されている建築用語の相互関係の検討を通して、「階」の意味を詳しく検討した。先ず、「階石」と「階砌山石」の「階」は「階段」と「基壇」の二つの意味として考えられるが、「砌」に注目すると、「階砌山石」の「階」は基壇であると考えられる。既往研究で「階段の袖石」と解釈されていた「巾階」は、「階石不磨」の規制を見ると、その不合理性が確認できる。

結果的に「屋舎条」では全ての階級に対して磨かれた山石の使用が禁止されており、眞骨のみが「中央階段(中階)」と「二重基壇(二重階)」を設けることが許されている。

4 『三國史記』と『三國遺事』の記事に見る「階」の建築形式

『三國史記』『屋舎条』には、現存する遺構では見られない古代の建築用語が多く記されている。韓国の建築史研究で「屋舎条」の解釈が持続的に議論されて来た理由は、その建築用語の解釈における観点の差があったためである。ここでは、『三國史記』と『三國遺事』を中心に「階」と関連した記事を集収して、それが「基壇」と「階段」、どちらの意味に解釈できるのかを検討してゆく。

4-1 階段と解釈される記事の分析

『三國史記』と『三國遺事』からは「階段」という用語は見当らない。『中国古代建筑辞典』で階段に関わる部分を見ると、「階(階、塔)」がそれに当り、その意味は「步上台基的梯級就是階、或者称阶级、阶梯」^{注23)}即ち、台基(基壇)に上がる施設であり、「梯級」あるいは「阶级」、「阶梯」とも呼ぶと記されている。また、「台阶」とも言われ、「從地面到台基的阶梯式的通道、叫台阶」^{注24)}と説明されている。結果的に「梯級」、「階」、「阶级」、「阶梯」、「台阶」はすべて「階段」の意味で、特に「梯」及び「級」などの用語は、「階」の形と密接に関わっていると

考えられる。

一方、『三國史記』と『三國遺事』で「階」が階段に解釈される記事はあまり多くない。また、「梯」及び「級」に関わる記事もしばしば見当るが、「梯」に関する記事のほとんどは戦争の時使う登城機具である雲梯に関する記録である。「級」は戦争中の首級、または官職の等級などの意味に使われる例が多い。その内で建築に係わる記事は『三國遺事』から次のようにいくつか見つけられる。

- 5) 其佛国寺雲梯石塔、彫鏤石木之功、東都諸刹未有加(『三國遺事』卷第五、孝善第九、大城孝二世父母神文王代)^{注25)}
- 6) 僧傳云…此下有八面七級石塔。掘之果然、因立精舍、曰靈塔寺、以居之。(『三國遺事』卷第3、塔像第4、高麗靈塔寺)
- 7) 国史云…其舍利分爲三、一分在皇龍塔、一分在大和塔、一分并袈裟在通度寺戒壇、其餘未詳所在。壇有二級、上級之中、安石蓋如覆鉢(『三國遺事』卷第3、塔像第4、前後所將舍利)

上記の史料5)の「雲梯」は、現存する佛国寺の青雲橋・白雲橋であり、はしご状の階段を指す。史料6)は靈塔寺の創建記録であり、「七級石塔」は七層の石塔を意味している。史料7)は通度寺の戒壇に関する記録であり、「壇有二級」は二段になっている戒壇の意味である。

上記の史料より「級」は層や石段の数であり、「梯」ははしご状の階段であることが確認できる。このような事例に基づいて次の記事を解釈したい。

- 8) 湘住皇福寺時、與徒衆繞塔、每步虛而上、不以階升。故其塔不設梯磴。其徒離階三尺、履空而旋、湘乃顧謂曰、世人見此、必以爲怪、不可以訓世餘如崔侯所撰本傳。(『三國遺事』卷第四、義解第五、義湘傳教)

上の記録は義湘と弟子たちが繞塔をする場面で、「階」から三尺離れて虚空を踏んで回ったとする。義湘は塔に梯磴がないため、階の空中に浮かんで繞塔をしたことが、人々の目には不思議に見えるはずだと気にかけている。ここで、梯磴と共に記されている前半部の「階」は階段を、義湘と弟子たちが三尺離れて繞塔をしたという後半部の「階」は基壇を意味していると解釈される。

即ち、「梯」と「磴」^{注26)}は「はしご状の階段」のように、定まった形式の階段を称するものであると考えられる。従って、史料8)で梯磴を踏んで上がれる「階」は基壇とも見られるが、材料及び形式に係わらず、すべての階段を称するものと解釈した方が妥当であろう。一方、梯磴が設けられてない階に上がり、階上で繞塔をしたという部分は、三尺も離れていたという記録から考えると、「階(基壇)」の上面から三尺離れた虚空で繞塔をしたと解釈した方が妥当であろう。即ち、この「階」は塔回りができる広さを持つ基壇を意味する。

史料5)の佛国寺の雲梯と史料8)で示したように、特定の形式の階段は、「梯」と「磴」のようにその形に従って記されたと考えられる。

4-2 基壇と解釈される記事の分析

現在、韓国建築で基壇と呼ばれる人工地盤は、中国では「台基」と表記されている。ところが、『三國史記』と『三國遺事』では現在の建築用語である「基壇」と、中国の建築用語である「台基」という用語は見出せない。ただ「台」や「基」や「壇」といった、それぞれの用語は見えるが、それが基壇の意味としては使われていない。特に、「壇」

の場合は、宗廟や社稷壇または仏家の戒壇に係わる記録のみに限られており、「台」と「基」も基壇として解釈される記録は見当たらない。

『三國史記』と『三國遺事』に記されている「台」と「基」は、『説文』の「台、觀四方而高者也」、「址、基也」という説明や『爾雅』「釈宮」における「四方而高曰台」、「基、据也、在下、物所依据也」という説明と同じ意味で使われている。即ち、「台」は四方を眺められる高いところ^{注27)}であり、「基」は敷地の意味^{注28)}である。以上の検討から分かるように、「台」、「基」、「壇」は、すべて現在の用語である基壇の意味ではない。

中国における基壇の用語の変遷については「古代には元々堂^{注29)}が基壇を意味したが、宋代には階基^{注30)}、清代以後から現在までは台基が基壇を意味する」^{注31)}という。韓国でも現在の建築用語である基壇が『三國史記』と『三國遺事』で見当たらない理由は、基壇に関わる他の建築用語が存在していた可能性を想定させる。

『三國史記』と『三國遺事』でも、「堂」が基壇の意味で記された記事^{注32)}がある。しかし「堂」は多くの場合、他の建物より位階が高い重要な人物の建物^{注33)}、あるいはその建物の基壇の意味として使われ、登場人物の権威が建築と共に表現されている。「堂」がこのような象徴性を担わず、ただ建物の一部の意味だけに記されている記事は見当たらない。

次は『三國史記』と『三國遺事』の中で基壇と解釈される「階」の記事である。

- 9) 又宋使臣劉達、吳拭來聘在館、宴次見鄉粧倡女、召來上階、指闊袖衣・色絲帶・大裙、漢曰、此皆三代之服、不擬尚行於此、知今之婦人禮服、蓋亦唐之舊歟。(『三國史記』卷第三十三、志第二、色服)
- 10) 明年甲午夏…海笑謂之曰、東海欲傾、水脈先漲爾。王不覺興拜。翌日感恩寺奏、昨日午時、海水漲溢、至佛殿階前、晡時而還王益信敬之…(『三國遺事』卷第四、義解第五、賢瑜珈)
- 11) 王后漸近行在、上出迎之、同入帷宮、媵臣已下衆人、就階下而見之即退。上命有司、引媵臣夫妻曰、人各以一房安置、已下臧獲各一房五六人安置(『三國遺事』卷第二、紀異第二、駕洛國記)

上記の史料では全て、「階」が領域や境界あるいは行事の場所の意味をもち、「基壇」の意味に解釈される。

史料9)は、宋国の使臣たちが新羅の身なりの女性に、階段を上がらせたとも解釈できる。しかし、文章全体の意味から見ると、基壇という場所での女人と使臣とのやりとりの描写として理解することが妥当であろう。従って、「上階」は「基壇に上がらせた」という意味に解釈できる。史料10)は、感恩寺金堂の「階の前」まで、海水があふれて満ちたという内容である。ある部分まで海水がみなぎった状況の意味であり、階段よりは基壇と解釈するのが妥当であろう。史料11)は、王が王后を迎えて假宮(帷宮)に入り、臣下たちが「階の下」からそれを見て退いたという内容である。王や王后と臣下たちの位置を、基壇の上と下に分けている状況を描写している。従って、ここでの「階」は王と王后の領域と臣下の領域を区別する領域の意味をもつ基壇であり、「階下」は基壇の下と解釈される。

- 12) 餘五人、各歸爲五伽耶主。東以黃山江、西南以滄、蒼海、西北以地理山、東北以伽耶山、南而爲國尾。俾創假宮而入御、但要質儉、茅茨不剪、土階三尺。

（『三國遺事』卷第二、紀異第二、駕洛國記）

上記の史料は 確かに「階」が基壇の意味に用いられる史料である。これは伽倻国の成立に関する内容で、仮宮の土階が三尺だという記録である。一般的に階段は尺ではなく級の数で高さを表現するが、ここでは土で造った階の高さが三尺ということで、土階は基壇の意味であることは確かである。

上で示したように、『三國史記』と『三國遺事』に記されている「階」は「基壇」を意味する場合が多い。「階段」と「基壇」のどちらでも解釈できる場合もあるが、韓国建築の場合基壇は建築物の下部構造において必要な部分であり、基壇がなければ階段は存在できない。

5. おわりに

『三國史記』『屋舎条』は九世紀ごろに制定された家舎制限である。しかし、今までの先行研究では、主に朝鮮時代の遺構との比較を通して「屋舎条」の解釈が行われてきた。そのため、本研究では「屋舎条」が文字で記された法令である点に主眼を置き、統一新羅と三国時代に関わる文献である『三國史記』と『三國遺事』から「階」の記事を収集し、それと共に現存する石造遺構の分析に基づいて「屋舎条」の「階」に関わる用語の解釈を試みた。

『三國史記』と『三國遺事』に記されている「階」は階段の意味で使われたこともあるが、ほとんどの場合は基壇を意味した。文献では「梯」や「磴」が階段を意味し、「中階」のように位置と共に記される場合のみ、「階」は階段を意味する。つまり、文献でそのまま「階」として記される場合、たいてい「基壇」の意味である。

従って、「屋舎条」の「階」は、「中階」以外は全て「基壇」に関する規制であり、全階級の民に対して「磨かれた石の使用」と「三重基壇の設置」を禁止する法律といえる。

幸いにも、「階」は「屋舎条」の記録のみでも、およそその検討をつけることができたが、それ以外の細部条項はより多くの研究が必要である。まず、韓国の文献研究及び発掘資料に関する総合的考察が進まなければならないし、同時に中国側の史料の検討も必要である。さらに、木造建築に関する遺構をよく保存している、日本の史料の検討も並行すれば、「屋舎条」で規制している住宅建築の形式が、より正確に検証できると期待される。

注

- 注1) 高麗忠烈王 7 (1281) 年普賢國師一然 (1260-1289) が編纂した歴史書で、『三國史記』と共に現存する韓国最古の史書である。『三國史記』には欠けている伝説や神話などの古記及び新羅の郷歌も収録しているため、韓国の古代文学史においても非常に重要な価値を持っている。
- 注2) 崔滋『東人作文』、四六卷十。高麗時代の 1355 年に刊行された文集。
- 注3) 本論文において『三國史記』と『三國遺事』の原典及び翻訳本は韓国史料研究室と韓国精神文化研究院の資料を活用した。本文の「屋舎」の内容中、「巾（中）」の表現は、韓国史料研究室の原典に従う。
- 注4) 韓国の家作規制は高麗時代には「家舎規制」、朝鮮時代には「家舎制限」もしくは「家堡制限」と呼ばれた。しかし住宅に関する規制は一般的に「家舎制限」で知られているので本論文にはこれに従う。
- 注5) 「屋舎条」は「室」を中心に記された建築規制として、「室」を一棟の建築物で見ると、一柱間で見るとによって解釈が変わる。現在韓国側の「屋舎」に関する研究は「室」の解釈に集中されている。
- 注6) 「屋舎条」と「唐会要」(961) を比較すると、「屋舎条」は室長広の寸法で、「唐会要」は間架の数で建物の規模を規制している。重櫺、栱牙、懸魚、獸頭の規制は両方の法律で共通しているが、廉、床、階、垣牆の規制は「唐会要」にはない。
- 注7) 李基白『新羅政治社会史研究』（一潮閣、1973 年）、pp. 66-88。
- 注8) これに関しては、韓国精神文化研究院が刊行した『譯註三國史記四註釋編（下）』（2001 年、p. 154）でも、同じように解釈している。
- 注9) 金正基「文獻に見る韓國住宅史」『東洋學』7 集、東洋學研究所、1977 年）、p. 95。
- 注10) 申榮勳『韓國のサルリムジブ』（悦話堂、1980 年）、p. 262。

- 注11) 朱南哲『「三國史記」屋舎條の新研究』（『金元龍教授停年退任記念論叢—美術』、金元龍教授停年退任記念会、1987 年）、p. 384。
- 注12) 李相海『「三國史記」屋舎條の再考察』（『建築歴史研究』第 4 卷 2 号、韓國建築歴史学会、1995 年）、p. 54。
- 注13) 『漢韓大字典』（民衆書林、2002 年）
- 注14) 注 13) と同じ。
- 注15) 尹張燮『韓國の建築』（ソウル大學校出版部、1996 年）、p. 195。
- 注16) 下の注 25) の参考図を見ると石材で枠を組んでその内に煉瓦を積み上げて造った基壇を「甃砌石縁」と名づけていることから、「砌」が基壇に係わる建築用語であることが確認できる。
- 注17) 井上秀雄訳注の『三國史記』には「巾階」が「巾の広い階」と訳されている。このように「巾階」と言う同じ用語に対する韓・日間の解釈の差は、建築文化の差を表す一つの事例だと考えられる。（井上秀雄編訳『三國史記』平凡社、1988 年）、p. 137。
- 注18) 『儀禮』「郷射礼」、席主人于阼階上、注、阼階、東階。
- 注19) 双楹塚は五世紀後半に造られたとされる高句麗の壁画古墳である。
- 注20) 新羅の骨品（身分階級）の中で両親が王族である血筋、またはその人。
- 注21) 『爾雅』「釈言」、重、再也。『集韻』、重、複也。『儀禮』「少年饋食禮」、蓋、二以重。「注」、重、累之。『大漢和辞典』参照。
- 注22) 現存する感恩寺の金堂と石塔の基壇は「二重階」であるが、これらに歩廊の基壇まで含めば「三重階」になる。これを見ると「階」は一棟の建物だけに付属する部分ではなく、住宅全体における敷地の造成方法にも影響を与えた可能性も考えられる。この問題はまた当時の建築観と密接な関係があるようであり、今後これに関する綿密な研究も必要だと考えられる。
- 注23) 北京市文物研究所編『中国古代建築辞典』（中国書店、1992 年）、p. 35。
- 注24) 注 23) と同じ。
- 注25) 『佛國寺歴代記』には「新羅景德王十年重建…佛國寺雲梯寶塔雕鏤石木之功、東都諸刹未有加也」と記されている。
- 注26) 下の参考図は『華城城役儀軌』の基壇と階段に関する図説である。しかしこの長い階段は「石梯」であり、層を積み上げた階段は材料によって「石磴」と「甃砌」に区別されている。これは朝鮮時代の資料であるが、佛國寺の青雲橋・白雲橋のような形の階段は「梯」と記されている。（華城は朝鮮時代の正祖 18 (1794) 年 1 月から工事が始められ、1796 年 8 月に完成した。『華城城役儀軌』はこの時の工事報告書である）

参考図 梯と磴（階段）、甃砌（基壇）

- 注27) ①蓋庵羅菴舊花果莊嚴、百歩樓閣、臺殿堂樹、都大雖微、勢皆活動…（『三國遺事』三卷、四塔像、四佛山、掘佛山、萬佛山）
②十七年、秋八月、築射臺於宮西、每以朔望習射（『三國史記』二十四卷、百濟本紀二、比流王、十七年）
- 注28) 靈鷲寺記云、朗智嘗云、此庵址乃迦葉佛時寺基也、掘地得燈缸二隔。（『三國遺事』五卷、八避隱、朗智嘗雲、普賢樹）
- 注29) 『周禮』、說明堂臺高三尺
『墨子』、謂、亮堂。高三尺、土階三等
『禮記』「禮器篇」、有以高為貴、天子之堂九尺、諸侯七尺、大夫五尺、士三尺…
- 注30) 基四周、沿辺而平鋪の石面、一般为長方形、叫階條石、又叫压面石、宋代称之为压欄石（北京市文物研究所編『中国古代建築辞典』、中国書店、1992 年、p. 35。）このような中国の台基型式で、「階條」と言う部分があるものも、宋代の「階基」の残影で考えられる。
- 注31) 古所謂「堂」、就是宋代所謂「階基」、清代及今所谓「臺基」（梁思成主編『中国建筑艺术图集—上集』、百花文艺出版社、2001 年、p. 5。、中国建築工業出版社『梁思成全集第 6 卷』、臺基簡説、2004 年、p. 238。）
- 注32) ①敦素既上任、別作大室以處、以仇都等罪人、不令升堂（『三國史記』卷第十四、高句麗本紀第二、大武神王）
②七年、八月二日、大置酒勞將士、王与定方及諸將、坐於堂上、坐義慈及子隆於堂下、或使義慈行酒、百濟佐平等群臣莫不嗚咽流涕（『三國史記』卷第五、新羅本紀第五、太宗武烈王）
- 注33) ①謝英規曰、若蒙恩一合、無道路之梗、即先致謁於將軍、然後升堂拜夫人、兄事而尊之、必終有以厚報之、天地鬼神、皆聞此語（『三國遺事』卷第二、紀異第二、後百濟甄萱）
②兼謝英規曰、若蒙恩一合、無道路之梗、則先致謁於將軍、然後升堂拜夫人、兄事而姊尊之、必終有以厚報之、天地鬼神、皆聞此言（『三國史記』卷第五十、列傳第十、甄萱）
③通後詣義湘之室、升堂觀奥、頗資玄化、寔爲鍾洞記主也（『三國遺事』卷第五、避隱第八、朗智嘗雲、普賢樹）
④又一夕、寺門有火災、閭里奔救、升堂見像、不知所、視之、已立在庭中矣。問其出者誰…（『三國遺事』卷第三、塔像第四、三所觀音、衆生寺）

(2006 年 5 月 10 日原稿受理、2006 年 10 月 13 日採用決定)